

The final exhibition of ozasahayashi_project

Withering Heights

kugenuma

Withering Heights 曝しヶ丘

kugenuma くげぬま

kugenumaはキオ・グリフィスと港千尋によるアーティストユニットで、2016年より活動を開始。京都での発表はフィンランドのトルクでのグループ展参加につづく、2回目の展覧会となる。

港 千尋 みなと ちひろ

1960年 神奈川県生まれ

イメージ、記憶、群衆などをテーマに作品制作、執筆、と広範な活動を続ける。著作『記憶一創造と想起の力』でサントリー学芸賞、写真展『市民の色』で伊奈信男賞を受賞。2007年第52回ベネチア・ビエンナーレでは日本館コミッショナー、2016年あいちトリエンナーレでは芸術監督を務める。

多摩美術大学情報デザイン学科教授。

近刊に『小さなリズムー人類学者による隈研吾論』（ウダ・ソフィーとの共著 鹿島出版会 2016）

Kio Griffith キオ・グリフィス

1963年 神奈川県生まれ ロサンゼルス在住

ビジュアルとサウンドの分野で作品を発表するアーティストであり、またキュレーター、エディターとして、主にアメリカと日本での活動を展開している。"Artillery 2015 1-2月「アジア特集号」" 編集長、"FABRIK"現代美術誌ライター。アーティストとして自らの家族の歴史をテーマに制作したインスタレーション「珊瑚海」(2015)、あいちトリエンナーレ 2016では、環太平洋地域を中心にさまざまな言語で語られた「色」にまつわるメッセージを集め、その「声」をオーケストレーションする作品"white house"を発表した。またロサンゼルス伝統ある前衛アートスペース"LACE"より、2017年度イメージングキュレーターに選出される。

















曝しヶ丘

解 説

白い布は日本のみならず、世界中でもっとも長く使われてきた素材です。有用性はもとより、それがもつ象徴やメタファーとしての機能は、儀礼や儀式に欠かせないものとして使われ続けています。kugenumaはこの点に注目して、すでに多くのアーティストが作ってきたひとつの「場」を、展覧会の期間に限定して変容を試みます。布と小さな写真のみによるインスタレーションは、風、光、雨といった自然現象を取り込みながら、空間に動きを与える、彫刻的な作品でもあります。

タイトルのWithering HeightsはWuthering Heightsのもじりです。あらためて言うまでもなくエミリー・ブロンテによる有名な小説『嵐が丘』は、19世紀ヴィクトリア朝の階級社会を背景にした悲劇ですが、タイトルに使われたwutheringという、ヒースの丘を吹き荒れる風の音を思わせるイメージが与えた影響は絶大でした。一字違いのwitheringは凋んでゆく、という意味ですが、日本語タイトルも『嵐が丘』に倣って『曝しヶ丘』としました。着物の町京都では、かつて長い布を川に流し、風に乾かす風景が見られました。静かに揺れ動くサラシは、常に陽の光や風や雨に曝されているこの会場の中央にある、露地へのオマージュでもあります。

港 千尋